

マシュー・アーノルドの文芸批評

— ハイネとバイロン —

内 藤 満

〔抄録〕

批評家としてのアーノルドの関心は非常に広い範囲に及んでいる。文芸批評の他にも、宗教、政治、社会、教育などに関する論文も多数書いている。そのためアーノルドの文芸批評は、文学論というにはあまりにも政治的であったり、社会的であったりと、文学以外の要素が入り込んでいる場合が多い。

本稿では、文芸批評の代表作である『批評論集Ⅰ』と『批評論集Ⅱ』から、それぞれ「ハイネ論」と「バイロン論」を、また、両者の間に書かれた、政治・社会批評の代表作である『教養と無秩序』とを取り上げる。そして、文芸批評に対する他の分野の影響を考察する。

キーワード：俗物主義，ギリシア主義，ヘブライ主義

はじめに

マシュー・アーノルド (Matthew Arnold, 1822-88) の『批評論集Ⅰ』(*Essays in Criticism, First Series*) は1865年に出版された。その特徴は、フランスやドイツなど、イギリス以外の作家を中心に論じていることである。1888年には『批評論集Ⅱ』(*Essays in Criticism, Second Series*) が出版された。イギリスのロマン派を中心に扱っているのが特徴的である。両者に共通して言えることは、各論文は基本的には文学を扱っているが、政治、社会、宗教、教育とあらゆる要素を含んでいることである。二つの論集の中でも、とりわけ、そのような要素が見られ、文学作品とは関係の薄い点で作家が評価されているものとして、『批評論集Ⅰ』では「ハイネ論」、『批評論集Ⅱ』では「バイロン論」があげられるだろう。アーノルドのハイネとバイロンに対する評価を理解するには、1869年、二つの『批評論集』の間に出版された『教養と無秩序』(*Culture and Anarchy*) がその手がかりとなる。

「ハイネ論」には『教養と無秩序』で論じられることになる主なテーマがすでに含まれている。「ハイネ論」から『教養と無秩序』に、そのテーマがどのように発展しているかを考察する

ことによって、同時に「ハイネ論」におけるアーノルドの評価の根拠が明らかになるだろう。また、そのことを理解した後「バイロン論」を読むと、アーノルドがバイロンの多くの文学的欠陥を認めながらも、なぜ高い評価を彼に与えたのかも理解されるだろう。

I

「ハイネ論」はまず冒頭にハイネ自身の言葉を引用している。ハイネは自分を「人間性の開放のための戦争における兵士」とであると言う。これに対してアーノルドは次のように言う。

Posterity will certainly decorate his tomb with the emblem of the laurel rather than with the emblem of the sword. Still, for his contemporaries, for us, for the Europe of the present century, he is significant chiefly for the reason which he himself in the words just quoted assigns. He is significant because he was, if not pre-eminently a brave, yet a brilliant, a most effective soldier in the Liberation War of humanity.⁽¹⁾

ハイネは将来は偉大な文学者として認められるだろうが、「彼の同時代人たちにとって、私たちにとって、今世紀のヨーロッパにとって」は、「人間性の開放のための戦争における兵士」としてのハイネが重視されるべきだと、アーノルドは考える。しかし、とりわけ、そのようなハイネの精神はアーノルドの生きたイギリスに最も必要とされたものであった。

アーノルドは『教養と無秩序』で、今のイギリス人はあまりにもヘブライ主義的であるので、ギリシア主義を讀えなければならぬと主張している。アーノルドによれば、ギリシア主義においては、「事物を如実に見ること」が最高の観念であり、「意識の自発性」がその支配的観念である。一方、ヘブライ主義においては、「行為と服従」が最高の観念であり、「良心の厳しさ」がその支配的観念である。アーノルドのいう「教養」が追求する、「全面的な精神的完全」に近づくためには、どちらが欠けていても、どちらに偏っていてもいけないのである。しかし、現在のイギリスでは、ギリシア主義が欠けているか、誤解されているとアーノルドは考える。イギリス人は道徳的完全の追求というヘブライ主義的な面を達成すれば、全面的な完全を得たことになると誤解しているとアーノルドは言う。

このようなイギリスの現状を救うためには、文学者としてのハイネよりも、人間性を開放する手助けとなる兵士としてのハイネが求められたのである。人間性の開放とはこの場合、ヘブライ主義的傾向がもたらす偏狭な考え方からの開放である。ヘブライ主義は、個人的意志ではなく神の意志を、つまり聖書の戒律を従うべき唯一のものとして考え、それに絶対的に服従し、献身的に行うことを讀える。このことが過度になると、人間としての自由な発想の展開が拘束される。そのような柔軟性を失ったイギリス人に対して、ハイネをギリシア主義の精神を代表

する人としてアーノルドは重視したのである。

次にアーノルドはこのような言う。

To ascertain the master-current in the literature of an epoch, and to distinguish this from all minor currents, is one of the critic's highest functions; in discharging it he shows how far he possesses the most indispensable quality of his office, — justness of spirit.⁽²⁾

そしてアーノルドは、ドイツ文学の中心、つまり主流にゲーテを置く。このゲーテから多くの川が流れ出たが、主流を受け継いだのはハイネであるとアーノルドは言う。カーライルはハイネが破壊することになるロマン派の作家たちをあまりにも重視した点で誤っているのである。ハイネが注目に値するのは、「ゲーテの活動の最も重要な系統において、ゲーテの最も重要なドイツ人の後継者であり、継続者である」⁽³⁾からなのである。そして、そのゲーテの活動とは「人間性の開放のための戦争における兵士」としての活動なのである。

このように主流を重要視する理由は『教養と無秩序』において最も良く説明される。アーノルドは、彼が地方人根性 (provincialism) と呼ぶ偏狭な考え方をイギリスの清教徒と新教徒的非国教徒がもつようになった原因は、彼らが国教に属する人のように、国民生活の主流と接触していないからだと言う。非国教徒や自力で作った宗教団体に属する人びとの場合、彼ら自身の独特な様式で、大発見をすることを尊重する。このことが彼らの全精神を占領する。そして彼らはこの大発見のために戦い、それを強く主張する。このように彼らは自己主張するのに忙しく、「教養」に向かう余裕や傾向をもたないのである。必然的に、彼らは地方人根性を助長することになる。

一方、国教会はその秩序や儀式、歴史が私たちの空想や考案をはるかに超越しているので、私たち自身の空想や感情のそとに、かなたに、人間精神の歴史的生活があるとの感じを私たちに与えてくれ、そのようにして、私たちの中に培養すべき新しい側面と同情とがあることを示唆してくれやすいのである。また、非国教徒などのように、発明のために戦う労を省いて宗教観を堅実にする。つまり、アーノルドが主流にいると言う場合、発足時の苦労も過ぎ、問題点も大体解決して、今や完全に安定している組織にいるようなことを意味していると考えられる。

ゲーテとハイネは戦う兵士であるけれども、自分たち自身の独自の信念のために戦うのではなく、反対にそのような信念に取りつかれ地方人根性をもつ人々を主流に戻し、全面的な完全を達成するための「教養」へと向かう余裕を与えようと努力する人たちなのである。

次にアーノルドは、ハイネが1830年にはゲーテのように緩やかな開放の進行に従う気はなく、人生の残りを俗物主義 (Philistinism) との激しい戦いに費やしたと言う。この俗物主義という言葉は、英語にはそれに相当する言葉がない。それはイギリス人があまりにも俗物的存在であるからだろうとアーノルドは皮肉をこめて言っている。

Philistine must have originally meant, in the mind of those who invented the nickname, a strong, dogged, unenlightened opponent of the chosen people, of the children of the light. The party of change, the would-be remodellers of the old traditional European order, the invokers of reason against custom, the representatives of the modern spirit in every sphere where it is applicable, regarded themselves, with the robust self-confidence natural to reformers as a chosen people, as children of the light. They regarded their adversaries as humdrum people, slaves to routine, enemies to light; stupid and oppressive, but at the same time very strong.⁽⁴⁾

「選ばれた人々、光の子ら」とはつまり、ギリシア主義の精神（近代精神）をもつ人たちのことである。彼らの「強く、頑固で、無教養な反対者」である俗物は、ヘブライ主義を代表している。

「ハイネ論」では俗物主義は近代精神の敵であり、イギリス人全体を象徴する言葉である。しかし、『教養と無秩序』では、第三章「野蛮人、俗物、大衆」で、貴族階級を野蛮人、中産階級を俗物、労働階級を大衆と呼んで、俗物主義の意味をより狭く定義づけている。俗物という言葉は光と光の子らに反抗することにおいて、特に頑固で片意地なものの概念を与え、その点で、事業や礼拝堂や茶話会などの機械的生活、あの陰気で偏狭な生活を形作るものを好む中産階級に最も適しているとアーノルドは言う。

『教養と無秩序』ではさらに進んで「最善の自己」について述べられている。アーノルドは三つの階級にそれぞれ呼び名をつけたが、すべての階級区分の下に人間性という共通の根底があるので、野蛮人にも俗物らしさや大衆らしさが感じられるものだという。他の階級も同様である。そして、とにかく三つのうちのどれかである限り、「通常の自己」の好むことをすることが幸福であると想像する。「通常の自己」とは階級によって異なるもので、自分の属する階級にとって利益となることのみを追求する地方人根性を意味する。しかし、アーノルドは、私たちは「通常の自己」を超越した、つまり階級の枠を越えた「最善の自己」を認めなければならないと言う。「最善の自己」をアーノルドは「正しい道理」とも言っている。これに従うことによって、各階級が自分たちの「通常の自己」の好むように行動することで無秩序な状態になるという危険を回避できるのである。しかし、イギリス人には自由に対するきわめて強い信仰と、正しい道理に対するきわめて弱い信仰があるとアーノルドは言う。

ハイネはイギリス人を嫌った。それは彼らの偏狭さのためであった。アーノルドはハイネの言うイギリス人の偏狭さを説明する。彼らは自分たちにとって我慢ならないほど不自由なものを廃止してきた。彼らが道理に合わないからではなく、実際に不自由であるからという理由で。彼らは理性に訴えることはなく、常に、自分たちの目的に都合のいいものとして、前例や慣行、文書に訴える。だから彼らは、ある意味では、すべての人々の中で最も観念の世界に近づきにくい人々なのである。フランス人は逆に観念に最も親しんでいる人々である。ハイネは

この理由のためにフランスを愛し、イギリスを嫌ったのである。

次にアーノルドはハイネがユダヤ人の血を受け継いでいることに注目する。

No account of Heine is complete which does not notice the Jewish element in him. His race he treated with the same freedom with which he treated everything else, but he derived a great force from it, and no one knew this better than he himself. He has excellently pointed out how in the sixteenth century there was a double renaissance, — a Hellenic renaissance and a Hebrew renaissance, — and how both have been great powers ever since. He himself had in him both the spirit of Greece and the spirit of Judaea; both these spirits reach the infinite, which is the true goal of all poetry and all art, — the Greek spirit by beauty, the Hebrew spirit by sublimity. By his perfection of literary form, by his love of clearness, by his love of beauty, Haïne is Greek; by his intensity, by his untamableness, by his ‘longing which cannot be uttered’, he is Hebrew.⁽⁵⁾

このようにアーノルドは、ハイネはギリシア主義の精神とヘブライ主義の精神の両方を持っていると言う。二つの精神をバランス良くもっているように思えるが、アーノルドはハイネをギリシア主義の代表として讃えているのを忘れてはならない。『教養と無秩序』では、ハイネと彼の同類の文人は、ヘブライ主義をギリシア主義の引き立て役として用いているので、不公平と歪曲があるとアーノルドは言う。しかし、ヘブライ主義的傾向のあまりにも強いイギリスには、ハイネは重要な人物であるのに変わりはない。

アーノルドのハイネに対する最終的な評価はこうである。

He is not an adequate interpreter of the modern world. He is only a brilliant soldier in the Liberation War of humanity. But, such as he is, he is (and posterity too, I am quite sure, will say this), in the European poetry of that quarter of a century which follows the death of Goethe, incomparably the most important figure.⁽⁶⁾

II

「バイロン論」におけるバイロン評価の基本的な考え方は、すでに「ハイネ論」に見られる。「ハイネ論」ではワーズワスやスコット、そしてキーツは、バイロンやシェリーよりも素晴らしい作品を残したけれども、彼らは近代文学の主流に属していないという欠点があると言われていいる。バイロンとシェリーは、彼らの近代文学の主流を流れようとする情熱的で、大きな努力のために、その実際の作品の不十分さがはっきりと認められた後でも、長く記憶されるだろうとアーノルドは言う。次のバイロンに対する言葉は「バイロン論」における彼の評価に関わる

重要な点である。

Look at Byron, that Byron whom the present generation of Englishmen are forgetting; Byron, the greatest natural force, the greatest elementary power, I cannot but think, which has appeared in our literature since Shakespeare. And what become of his wonderful production of nature? He shattered himself, he inevitably shattered himself to pieces against the huge, black, cloud-topped, interminable precipice of British Philistinism.⁽⁷⁾

「バイロン論」では、アーノルドはバイロンをワーズワスと同等の優れた作家であると言う。コールリッジやキーツ、スコット、それにシェリーなどは彼らより価値が低いと見なされている。「ハイネ論」に比べてシェリーの地位が低くなっているのが大きな変化である。

アーノルドはまずバイロンの欠点をあげることから始める。アーノルドによれば、バイロンは詩的作品が、まず彼の心の中で成長し、成熟して、一つの有機体として発生してくることは有りえない人であり、それは自己の内部に、芸術的な素質を十分に持たず、十分な自制心も欠いていたためであると言う。しかし、そのような欠点はあっても、彼は一つの事件、一つの状況を、生き生きと考え、それに身をゆだね、それが現実であるかのように、また、それを見ているかのようにとらえ、私たちにそのことを見せ、感じさせてくれる素晴らしい能力を持っているとも言っている。はじめに評価を落とすような欠点を並べ、しばらくして今度は称賛を並べることによって、作家の長所を際立たせるというのは、アーノルドがよく使う手段である。しかし、個々の場面を写實的に伝えるということが、バイロンの価値を高めている主な理由ではない。この称賛も積極的な評価というより、欠点に対する苦しい弁護に思われる。この後もバイロンに対して厳しい批評が続く。彼の詩の文体は非常に散漫で、非常にだらしなく、ずさんで、不適切である、そして、芸術的才能としては、野蛮で無感覚なものを持っていたとまで言っている。

アーノルドは結局、バイロンの最大の価値をその個性に置く。

With Byron it was different. What he called the cant of the great middle part of the English nation, what we call its Philistinism, revolted him; but the cant of his own class, diferring to this Philistinism and profiting by it, while they disbelieved in it, revolted him even more. 'Come what may', are his own words, 'I will never flatter the million's canting in any shape.'⁽⁸⁾

アーノルドがバイロンをワーズワスと並ぶ偉大な詩人とした一番の根拠は、ハイネと同じように彼が俗物主義を嫌うギリシア主義の精神の持ち主であったからである。

True, also, as a poet, he has no fine and exact sense for word and structure and rhythm; he has

not the artist's nature and gifts. Yet a personality of Byron's force counts for so much in life, and a rhetorician of Byron's force counts for so much in literature!⁽⁹⁾

1900年代に入り、前世紀の詩的栄光をイギリス国民が語り始める時、その冒頭にワーズワスとバイロンの名があげられるだろうというアーノルドの予言は、バイロンについては当たらなかった。少なくとも今日、バイロンにワーズワスと同等かそれに近い地位を与える人はいないだろう。このような誤った評価は、作品ではなく、作家の個性を重視する限り常に起こりうることである。作品と作家の個性は切り離せるものではないとの批判が出るだろう。しかし、アーノルドは、「ハイネ論」と「バイロン論」において明らかなように、両者を切り離して考えている。それは、この章の冒頭でも述べたように、作品が不十分であっても、主流にいないこと、つまりギリシア主義の精神をもっていることで埋合せがつくと考えていることにも現れている。

おわりに

アーノルドの文芸批評は、多かれ少なかれ、近代精神ということを意識している。19世紀のヨーロッパ、特にイギリスは俗物主義がはびこり、無秩序な状態に陥る危険性をもっているとアーノルドは考えた。そしてその状況を救うために、近代精神に目覚めることを訴えた。彼が作家を評価する時に、自分の目的に合う作家に気を引かれたことは自然なことであった。

注

- (1) Matthew Arnold, *Lectures and Essays in Criticism*, R.H.Super, ed. (Ann Arbor, The University of Michigan Press, 1962), 107.
- (2) Matthew Arnold, *Lectures and Essays in Criticism*, 107.
- (3) Matthew Arnold, *Lectures and Essays in Criticism*, 108.
- (4) Matthew Arnold, *Lectures and Essays in Criticism*, 112.
- (5) Matthew Arnold, *Lectures and Essays in Criticism*, 127-8.
- (6) Matthew Arnold, *Lectures and Essays in Criticism*, 132.
- (7) Matthew Arnold, *Lectures and Essays in Criticism*, 132.
- (8) Matthew Arnold, *Matthew Arnold's Essays in Criticism*, Everyman's Library (London: Dent, 1969), 325-6.
- (9) Matthew Arnold, *Matthew Arnold's Essays in Criticism*, 327.

『教養と無秩序』の内容をまとめるのに、多田英次氏の訳を使用、または参照させて頂いた。また、「バイロン論」は荒牧鉄雄氏、森田正実氏の訳を使用、または参照させて頂いた。

(ないとう みつる 文学研究科英米文学専攻博士後期課程)

1999年10月15日受理

